

「青鞥」同人をめぐるセクシュアリティ言説

——一九一〇年代を中心に——

呉 佩珍

1. はじめに

1911年は、日本の女性解放運動史におけるターニング・ポイントであった。同年9月に、松井須磨子によってイブセンの『人形の家』が初演され、同月に日本における最初の女性解放運動組織「青鞥」が結成された。このめまぐるしい一連の女性にかかわる変化のなかで、当時の日本社会に最も衝撃を与えたのは、あいつぐ女性同士の心中事件であった。同年7月30日に工學博士と専売局主事の令嬢たちが起こした心中事件¹⁾は、日本社会で女性同性愛現象への関心を大きく呼んだ契機にもなったのである。

古川誠は、この時期における〈同性愛〉認識の変遷について、以下のように指摘している——「1910年代から20年代の女学生による同性愛関係の社会問題化と、日本語における『同性愛』という用語の定着とは切り離せない関係にあるということが出来る。『男色』から『同性愛』へ、というキーワードの変遷は、その後ろに男性中心の同性愛から女性中心の同性愛へという認識論的転換が隠されていたことは間違いない」²⁾。この指摘は、1911年に起ったこの女性同士の心中事件が、当時の社会にいかに大きな衝撃を与えたかを物語っている。もし、日本の女性同性愛の存在をそれを表す言葉の有無で判断しようとすれば、日本の女性同性愛は、1910年代以前には存在しなかったといえるのである。それ以前、〈同性愛〉は〈男色〉といわれた。つまり、男性限定のホモセクシュアリティとしてしか認められてはいなかったのである。

このような時代背景のなかで、女性のセクシュアリティへの監視は一層厳しくなっていた。1911年に創立された「青鞥社」の同人たちも、ただちにスキャンダルの種になり、セクシュアリティにかかわる醜聞に巻き込まれた。実際、この時期における「青鞥」同人のセクシュアリティに注目してみると、ホモセクシュアリティとヘテロセクシュアリティの境界線がぼやけ、各自のジェンダー・アイデンティティがゆらぐ傾向にあることがわかる。つまり、彼女たちは、同性とだけでなく、異性とも交渉していたのである。また、お互いの関係で占める性的役割が、彼女たちの身体的性〈セックス〉とは必ずしも一致するものではなかった。そのため、同人の間の同性愛スキャンダルは、1911年にあいついで起った女性同性愛者の心中事件とともに、当時の社会の女性同性愛現象にたいする意識を高めたともいえよう。

日本の女性運動史上はじめての女性解放運動文芸組織といわれる「青鞥」その同人たちのほとんどは、皮肉にも、良妻賢母主義と家父長制度のなかで育てられた女学生であった。彼女たちのジェンダー／セクシュアリティは、〈絶対的異性愛〉体制のイデオロギーの下に管理され、規定されるはずであった。だが、「青鞥」同人たちの曖昧なセクシュアリティとジェンダー・アイデンティティは、〈強制的異性愛〉によって創出されたものの、しかしながら、同時に〈女性

同性愛)を病理化する言説に対して挑戦し、良妻賢母主義に規定されるジェンダー秩序を攪乱したものである。このことは、「青鞥」が行っていた運動において、いかなる意味を持つのであろうか。また、「青鞥」同人の同性愛傾向は、1910年代初期の女性解放運動史の中でいかなる意味を持っているのだろうか。以上の問題点をふまえながら、本文は、「青鞥」における二組のカップル、すなわち、「青鞥」の創始者・平塚らいてうと尾竹紅吉、そして、田村俊子と長沼(高村)智恵子に焦点をあてる。

らいてうと俊子は、自分たちの〈女性同性愛〉体験について、随筆や小説の形で書き残している。これらの文献を再検討することによって、当時の〈女性同性愛〉言説が明らかになり、1910年代初期の女性運動史について新たな視点が得られよう。彼女たちは自分たちの身体的性〈セックス〉と社会的性役割とのあいだの秩序関係をいかに考えていたのか。また、「青鞥」は、当時の日本の家父長制度に拮抗する反対勢力としていかに形成されたのか。本文の目的は、「青鞥」同人たちの〈真正な〉セクシュアル・オリエンテーションやジェンダー・アイデンティティのあり方を究明することではない。むしろ、彼女たちの身体的性とジェンダー・アイデンティティやセクシュアリティの断絶や矛盾こそ、まさに、同時代の性科学言説や良妻賢母主義に支えられた〈強制的異性愛〉という制度——〈正常〉と〈異常〉、規範と逸脱、男性性と女性性、同性愛と異性愛とを二項対立的にとらえ固定化しようとする制度——に抵抗し異議申し立てを行うものであったことを、当時の文献の検討を通して明らかにすることにある³⁾。

2. セックス・ジェンダー・セクシュアリティをめぐる「青鞥」同人周辺の言説

1911年の日本社会において、〈女性同性愛〉に関する言説は、いかなるものであったのだろうか。同年7月、女学生同士の心中事件が起こった直後、マス・メディアは、女性同性愛現象に注目しはじめ、この現象は、家父長社会にとって得体の知れない「恐るべき」存在であるとして警戒を強めた。再生産至上主義的な異性愛秩序をその構築原理とする家父長制は、女性同性愛をその「恐るべき」他者として創出し、〈不自然な〉ものとして病理化することを通じて、異性愛を〈健全なる〉ものとして構築していった。女子学生のセクシュアリティへの監視を一層厳しく強化した女子教育に携わる教育者の姿勢は、当時のマス・メディアの報道からも窺い知れる。

同年9月、『新公論』の「性慾論」特集号に収録された桑谷定逸の「戦慄す可き女性間の顛倒性慾」⁴⁾のなかに、当時の女子教育者の発言が引用されている。そこには、女子学生のセクシュアリティ管理をめぐり、異性間交際から同性間交際へと着目点が変わっている。

某女教育家曰く、近頃同性の恋愛は珍しいことではない、他の女学校の生徒間にも随分此の傾向があるらしい。

現に府立女学校の女学生間にはオメといふを使用され、或る私立女学校ではデヤ(愛)におの敬語を冠してオデヤといひ、お茶の水の女学校にはお熱、学習院女学部にはハカライ、跡見女学校には御親友、その他各女学校が皆それゝ此の方面の言葉を使用されてゐる。此等の語は果たして不自然なる熱愛に捕らはれてたるに出たるものらしいが、何れにしても女子教育家は大いに注意を払ふべき問題として、互いにその悪風を防ぐことに苦心してい

る⁵⁾。(下線筆者, 35頁)

〈女性同性愛〉が、女学校に多く見られるという以上の指摘は、すでに起った女学生同士の心中事件を意識したもので、各女子校でよく見られる〈同性の恋〉ごっこに警告を発することを目的としていた。良妻賢母育成をその目的とする女学校は、女学生を異性愛者に教育するという使命をおびている〈制度〉同様で、女子学生間に生じた女性同士の親密な交際という実践を通じて、その制度は内部から崩される可能性があった。したがって、女学生同士の心中事件という極端な出来事が起ったため、女学生のあいだに行われていた親密な交際は、教育者側から「悪風」と見なされはじめた。このような「悪風」は、女学校という制度の規範を根底から揺さぶるものであるため、「不自然」な「悪風」としてことさら病理化されてしまったと思える。桑谷の論から、当時の医学領域における〈同性愛言説〉、つまり、〈女性同性愛〉が病的なものという通説が、すでに社会に流布されつつあったことがわかる。

兎に角、顛倒衝動をリファインして、他人に之を感染せしめぬやうにするのが最上の策である⁶⁾。

ここから、〈女性同性愛〉は、女学校が推奨する良妻賢母主義からの攻撃を受けていただけでなく、当時の日本における性科学言説から、〈伝染病〉というレッテルが貼られていたことがわかる。当時の日本における性科学は、ヨーロッパのハヴロック・エリスやエビングなどの性科学言説から徐々に影響を受けはじめていた⁷⁾。とはいえ、1911年以前、日本の同性愛言説は、あくまでも医学領域にとどまっていた。しかし、〈女性同性愛〉が社会問題になるにしたがって、性科学の見方と解釈は、教育を含めたより広範な領域に適用されるようになったのである。同じく、『新公論』の「性欲論」特集号に掲載された内田魯庵の「性欲研究の必要を論ず」から、女性同性愛者の心中事件が契機となり、性科学が重要視されつつあったことが窺える。

近年独逸では性欲教育と言うことが教育社会の問題となつてゐる。

(中略)日本の教育社会にもボツボツ此問題を生じて、殊に近年同性恋愛の弊風が到る処に生ずるに随つて益々此問題に必要が迫つて来たやうである。⁸⁾

性科学言説を援用し、女子教育の一環としてのセクシュアリティ管理を一層強化すべきだという主張は、女学生間に多発していた〈女性同性愛〉への対応策と見られる。逆の見方をすれば、女学生間の〈同性愛〉を取り締まろうとする姿勢が、同時代の〈女性同性愛〉に関する言説を増殖・増幅させたのだともいえる。実際に、良妻賢母主義を擁護することで名高かった『婦女新聞』は、その典型と見てよい。心中事件が起った直後、同紙は、女学校の校長や卒業生、および医者 را 招き、紙面で女性同性愛現象について盛んに議論を交わした。1911年8月11日の「同性の愛」や「同性の恋と其实例」をはじめ、同月25日の「同性の愛の研究」など一連の記事は、女学生たちのあいだに多発しているこの「病的友愛」、あるいは「病的肉欲」⁹⁾という「同性の恋」は、「社会道德の衰え」によって、「官能的刺戟が性欲の発作年齢が以前より早くなつて居

るに拘わらず、結婚難てふ〔ママ〕社会的現象と極端なる男女隔離主義とに依つて、精神的にも肉体的にも適当に性欲を満足するの機会に遠つた結果」¹⁰⁾だと指摘した。「結婚難てふ〔ママ〕社会的現象と極端なる男女隔離主義」が原因で、女性が同性愛に走ってしまったという指摘は、あくまでも〈異性愛中心主義〉的な発想を示しており、同性愛は異性愛の劣った代用品にすぎないとしている点で、同性愛恐怖症の言説であるといえる。

また、『婦女新聞』における〈女性同性愛〉言説には、西洋の性科学の二元論的立場の影響が明らかに見られる。つまり、セクシュアリティは、ホモセクシュアル＝アブノーマルとヘテロセクシュアル＝ノーマルに分けられるとする、二元論的立場である。そのため、〈女性同性愛〉は、〈性倒錯〉か〈病的〉だと見られ、異性愛という規範から逸脱したものと定義されてしまうことになっている。また、前述した当時の日本におけるマス・メディアの女学生心中事件に対する反応からみれば、セクシュアリティの二元説は、強制的異性愛のイデオロギーと癒着していると指摘できる。つまり、西洋の性科学言説は、「良妻賢母主義」を目標とする女子教育にとって、女性のセクシュアリティを管理するにはまさしく好都合な道具であった。女性同性愛が「恐ろしい性倒錯」と見なされたのは、異性愛中心主義のホモフォビアによるだけではなく、良妻賢母主義を支える〈強制的異性愛〉というイデオロギーの働きによるものでもある。また、そこには、男性がしっかり管理しなくては、女性は容易に性的に墮落すると見なす男性中心原理が明らかにみられる。当時の〈女性同性愛〉に関する言説を検証すると、良妻賢母主義が、女性の身体的性とジェンダーと欲望とは、矛盾することなく一致すべきものであり、それらのあいだには必然的な連続性があるとするイデオロギーに支えられていたことは明らかになる。またそこでは、異性愛のみが（それが家父長制社会の基盤であったため）、絶対唯一の「正常」なセクシュアリティだとされている。「青鞥」同人が挑戦したのは、まさにこのような性的規範だったのである。

セクシュアリティ管理体制が強化されつつあった時代風潮のなかで、「青鞥社」は、良妻賢母主義を擁護する女子教育者たちからだけでなく、当時のマス・メディアからも風当たりが強かった。その主な原因は、同人たちがあいついで起こしたスキャンダルにあった。「青鞥」同人たちが批判を受けたのは、厳然たる男女の境界線を越え、男性の領域を侵犯したためでもあった。逆に、「青鞥」同人にとっては、ジェンダー／セクシュアリティの境界攪乱は、明確なジェンダー・アイデンティティと異性愛を強制する家父長制社会への抵抗の手段でもある。

たとえば、吉原に登楼し花魁を訪ねたり、またバーの「鴻の巣」で五色の酒を飲んだりすることなど、当時、公共圏に参与する男性の特権を、「青鞥」の同人たちは女性でありながら行使していた¹¹⁾。彼女たちの性的なスキャンダルはあいついで槍玉に挙げられ、とくに同人の間の同性愛関係もマス・メディアに大きく取り上げられた。1912年7月10日付の『萬朝報』の「女文士の吉原遊」は、平塚らいてうや尾竹紅吉たちが、吉原の花魁を訪問したことを報道した。「小供の中から彼塵人と遊ぶのは大好き、若男だつたらと男が羨ましくなりました。浅草の銘酒屋もよう御坐（ママ）いますネ、今度は呼ばれたら上がつて見やうと思ひます」という紅吉の感想には、レズビアン的雰囲気が見える。一方、1912年11月29日から12月9日まで、『東京日々新聞』に連載された「妙な恋 雷鳥と紅吉と草平」は、「越中富山の山中で斯様な不思議な恋に育まれた紅吉は両親に伴れられて東京に出、更に大阪で八九年の長い間育てられた、この間に

紅吉自身はちツとしてゐても他の女から働きかけられて妙な恋が成立つた事が度々ある」と、尾竹紅吉を生まれつきの女性同性愛者と評している。また、らいてうについては、「紅吉は飽く迄自分〔筆者注：らいてう〕の物にしてゐたい、自分は奥村¹²⁾や海禅庵の中原¹³⁾を遊んでゐても紅吉は放したくない、紅吉の心は飽くまで自分に集中させて置きたい、紅吉に餘所見をさせたくない」と、らいてうを両刀使いの色情狂として表象した。

当時の報道が中傷誹謗の砲火を集中していたのは、彼女たちのセクシュアリティ問題であった。その中では、とくに同人の間の同性愛関係問題が標的とされた。彼女たちのセクシュアリティ絡みの醜聞が、攻撃的にされたのは、当時〈女性同性愛〉を〈病的〉とする言説を仕立てた当時の性科学言説が、良妻賢母主義と共犯関係にあったからである。つまり、彼女たちのジェンダー／セクシュアリティは、曖昧であるため、ホモセクシュアル＝アブノーマルとヘテロセクシュアル＝ノーマルという二元的範疇にすっきりおさまりきれず、体制側からみれば、境界の不明化を行う危険因子であったのである。

では、当時の「青鞥社」における女性同性愛現象（以下、レズビアニズムとなる）は、実際、いかなるものであったのだろうか。以下、「青鞥」同人たち自身による同性愛関係の記録を介し、当時の「青鞥」同人たちのあいだのレズビアニズムについて検証する。

3. 異性愛パラダイムの再演——田村俊子と長沼（高村）智恵子——

「青鞥」同人たちの同性愛関係に関する記録は、当時のマス・メディアが取り上げたスキャンダルに限らず、「青鞥」同人自身による、小説や随筆の形で残されている。特に平塚らいてうは、自分と尾竹紅吉との交渉の委細を「他日の研究の材料——他日女性みづからによつて、成就せられる女性研究の材料ともしたい」¹⁴⁾という前言をつけながら、「一年間」という題で『青鞥』（第3巻第2号）に発表した。田村俊子の場合、1911年1月から『大阪朝日新聞』で連載された小説『あきらめ』をはじめ、のちに女性同性愛に関する小説「春の晩」「若いころ」などにおいて欠かせないテーマとして、〈女性同性愛〉への関心があった。実際、「青鞥」の発足をきっかけにして、俊子は長沼（高村）智恵子との交友関係をはじめた。二人のあいだの〈同性の恋〉については、俊子の小説「悪寒」と随筆「日記」が、生々しく語っている。

田村俊子と長沼智恵子は、ともに日本女子大学の出身者であり、また「青鞥」初期の同人である。『青鞥』創刊号に掲載された俊子の「生血」は、男性に貞操を奪われた女性の憎しみと、貞操観念の呪縛から逃れえない女性の悲しみを克明に描いた、〈女性解放〉をめざす『青鞥』創刊号を飾るにふさわしい小説である。一方、智恵子は、創刊号の表紙デザインを担当した。彼女たちの交遊はこの時期からはじまっていたが、俊子はこの時点では、すでに田村松魚と未入籍のまま、結婚していた。のちの智恵子は、高村光太郎のもとに走り、俊子のもとを去った。1913年10月、俊子が『文章世界』に発表した「悪寒」は、智恵子を読み手と想定した書簡体小説である。この小説を通して、俊子は、夫・田村松魚との異性愛関係のなかで、自分に期待されている〈女〉の役割を嫌悪する心情を述べている。

わたしはこの人〔筆者注：夫・田村松魚〕に優しいしほらしい紫苑の花のやうな女を妻に

持たしてやり度いと思います。(中略) 理屈などを云ふ事の知らない柔順な可愛らしい女を、この人の傍に置いてやり度いと思ひます。然う思つて私は時々泣いてゐます。(中略) けれど何うすることも出来ません。

(「悪寒」『田村俊子作品集 第1巻』, 274-5頁)

俊子は、自分は「優しいしほらしい紫苑の花のやうな女」ではありえず、「理屈などを云ふ事の知らない柔順な可愛らしい女」でもありえないことを自覚しており、さらに女性にそのような特性を強制する異性愛への強い抵抗感を示している。また、男性の視点を同化している嫌いも見てとれる。また、智恵子に対して共同生活をはじめようと懇願する意志が見える。

私の周囲から脱れて、さうしてあなた〔筆者注：智恵子〕と二人限りの生活を初めやうかとさへ思つてゐました。私はあなたとさへ一所に居たら、世間を忘れた放縦な生活が出来ると違ひないと思つたからです。(中略) 男と云ふものから離れて、然うした女同士の気散じな生活を考へ付くと、もう何となく私の身体は大な海の真中にでもゆらゝと乗り出たやうな好い気がした。(前掲文, 272頁)

以上の引用から明らかなことは、智恵子との共同生活を介して、俊子が智恵子との〈ノー・マンズ・ランド〉的ユートピアを夢見ていた、ということである。文字通りの意味で、「男と云ふもの」や、それが含意する異性愛秩序のない世界を築き上げ、ヘテロセクシュアルな生活のなかで規定される〈女〉の役割から逃れたいと望んでいたということでもある。では、俊子が智恵子に求めたものは、一体何であろう。夢と理想を共有する俊子と智恵子のあいだの関係は、男女間にあるような力関係の格闘や、ジェンダー的役割から自由なものでありえたのであろうか。

さうして多くの男の友達を持ちながら、つひぞ今まで恋を知らずに来たと云ふあなたが、私には小鳥の手触りのやうに柔らかく、可愛ゆくなつかしかつた。(中略) 私はあなたの手を曳いた時その純な血の脈打つのを、萌初めた草の芽を弄ぐる様な快い懐かしい感じで味はつたりしました。(前掲文, 270頁)

以上の引用からわかるように、俊子は、自分がすでに喪失した処女性を智恵子が持っていることを羨望し、「恋を知らずに来」た智恵子に、過去の自分を投影しているともいえる¹⁵⁾。つまり、処女性を重視するという意味では、いまだ男女関係という枠によって価値観が定められている。さらに、いささか受動的に描かれている智恵子像から、俊子とのあいだのジェンダー秩序がいかなるものであったかがわかる。たとえば、「丹色と水色の絵日傘を買つて、あなた〔筆者注：智恵子〕には丹色が似合ひ、私には水色が似合ふ。(中略) 二人ながら、抱き合ひ度いやうに悲しい、心持になつたりしたある晩もありました」¹⁶⁾ という描写などからわかるように、つまり、智恵子との関係で、俊子は、自分が男役を演じることを願っている¹⁷⁾。この男性性のジェンダー・ロールは、俊子にとって、夫との異性愛関係のなかでは絶対に獲得不可能な役割である。

4. 男性性ジェンダー・ロールをめぐる葛藤——田村俊子と平塚らいてう——

実際、この時期の「青鞥」同人の同性愛関係では、男性性のジェンダー・ロールへのこだわりが、その関係が成立するかいなかを大きく左右するものであった。このことは、俊子とらいてうとの交渉関係のなかで、決して見落としてはならないものである。この交渉関係は、同時期の「青鞥」同人による同性愛関係の記録のなかでは、あまりふれられていない。しかしながら、1913年7月『中央公論』で、俊子がらいてうに関して発表した二つの随筆は、きわめて異色なものであったといえる。俊子は、らいてうと自分が、かつて同性愛関係を結ぼうとしたが、結局、失敗したその経緯をこの二つの随筆のなかで描いている。

1913年7月号の『中央公論』が特集した「平塚明子論」に、俊子は「平塚さん」の一文以外にも、「日記」を寄稿している。この二編の随筆は、一見、お互いに関連がないように見えるが、実際には、俊子個人の〈らいてう観〉を呈示するという点を見れば、共通している。「平塚さん」の一文のなかで、俊子は、主に、らいてうの身体的特徴をクローズ・アップし、らいてうの男性的な特徴を強調している。本文の冒頭は、らいてう自身が、かつて人から男性的な身体特徴を持っているといわれたことがある、というところからはじまる。

「××さんがね。平塚さんの頸から上に男性的なところがあるつて云つたの。」〔成る程〕、女にしては大き過ぎるのどぼとけに思ひながら、ひよいと見ると平塚さんの頸に髭がある。それから顔を突き出して仔細に点検すると、中々長くつて濃い。普通の生毛とは違つてゐる。
（「平塚さん」『田村俊子作品集 第3巻』、339頁）

俊子は、らいてうの男性的な身体の特徴を描写することで、すでにマス・メディアによって取り沙汰されていたらいてうの女性同性愛を裏付けるばかりでなく、彼女のジェンダーが男性性であることをも暗示している。実際、このらいてうの身体的特徴を強調している随筆は、俊子とらいてうが、〈男〉のジェンダー・ロールをめぐり行うバトルの前触れともいえる。同じく、『中央公論』7月号に寄稿した「日記」は、俊子とらいてうとの一日行楽の記録である。その冒頭で、俊子が夫と二人で、新居を探すために巣鴨方面に出かけたところ、らいてうとぼったり出会い、その場でらいてうから堀切へ遊びに行こうと誘われる。俊子は「その気になつて、此処まで一所に連れ立つてきた主人と別れる」¹⁸⁾。この描写は、俊子が、いかに〈女の友情〉を大事にしているのを教えてくれる。また、「日記」は、ここを分岐点として、一気に〈異性愛〉の次元から〈同性愛〉の世界へと展開していく。

とはいえ、これからの展開は、まさに先の随筆「平塚さん」の延長ともいえる。らいてうに関する描写は、身体的特徴にとどまらず、さらに彼女の仕草と行動までに及んでいる。まず、らいてうの身のこなしについては、「相変わらずセルの袴を穿いて、齒の音のする下駄を穿いてゐた」と、らいてうの男装習慣を指摘している。その後も、らいてうの仕草と行動について、「男性的」という表現を何回も繰り返している。「男性」的な身体特徴を持ちながら、やはり「女性」であるという記述は、らいてうの性とジェンダーとのあいだの断層を一種の矛盾として呈示している。

H〔筆者注：らいてう、以下同。〕は電車に乗ると腕組みをして何処か男性的の身体の構へをするのが癖だが、今日も然うした構へで、厳然とした眉付をして黙り込んでゐる。

（下線筆者。「日記」『田村俊子作品集 第3巻』, 341頁）

眉が殊に濃い。袴の裾をひろげて寄つかゝつてるHの様子は何う見ても男である。それでもあの袂の中には打粉おしろいの「撫子」が入つてゐるのである。

（下線筆者、前掲文 347頁）

身体的な構えや振る舞いを通じて、男性性のジェンダーを構築していたらいてうは、「打粉おしろいの『撫子』という女性の化粧小道具」によって、自分の身体的性＝女性性を露見させていたのである。だが、らいてうの身体的性＝女性性を露見させることは、らいてうの男性性のジェンダーを絶えず意識してきた俊子にとっては、一種の矛盾としてとらえざるをえなかったのである。

らいてうについての描写は、彼女の外部の身体的特徴から、さらに内部の感情構造へと移り、らいてうの能動的な男性性を強調しつづけている。

矯飾のないその顔付には、恋情的のチャームはちつともないが、いつもの通り、直ぐにも物を掴み挫ぎさうな熱つばい感情の揺ぎが、迸るやうにその眼の隈から頬へかけて表はれてゐる。

（前掲文 344頁）

俊子はらいてうの身体、そして彼女の内面感情に潜むマスキュリティを絶えず強調することを通して、らいてうと自分との同性愛関係が成立不可能であることを予告しているようである。のちに、俊子がお酒に酔って、「誰の心でも自分の唇を直ぐに吸い付けてやり度いやうな放恣な気分」と、らいてうに告白したら、らいてうはただちに「燕〔筆者注：奥村博史〕の代わりになれ」¹⁹⁾と俊子を誘惑した。この誘いにたいして俊子は、らいてうにはどうしても「恋愛的な感情」が起きないことを率直に語る。

今の私の感覚は酔ひの中にほんのりと色ざしてゐる恋の中にばかりいつばいに動いてゐるのである。私は浮れ心地になつてゐるけれども矢つ張りH〔筆者注：らいてう〕との感情とは何の交渉もないやうである。私は矢つ張りHの手をとる気もしないで歩いてゆく。

（下線筆者、前掲文 347頁）

いかなる放恣な気分になつても、らいてうのことを〈恋愛〉相手とは、見なせないことは、俊子が絶えず強調したらいてうの〈男性性〉と関係している。つまり、俊子とらいてうとのあいだには、相方もも男性性を志向したという、ジェンダー・ロールをめぐる相克が存在していたのである。この問題は、俊子が、ひそかに智恵子とらいてうとを比較するところに顕著に表れている。

Hとかうして一所にゐる間は、わたしの心はHのために石膏にされるような気がする。これがN〔筆者注：智恵子〕なら、もうちつと相手を享樂する事が出来るのである。Nと私の感情が、もうちつとさまざまな幻影のうちに芸術の匂ひを帯びて溶け合ふ事が出来るのである。私はNに対するあの一種の親しみもなつかしみも其処からくるのである。私は自分の傍に垂れてゐるHの柔らかな手先を見詰めてゐながら、中々その手を取る気になれない。あの手を取つても、Hの身体は容易く私の手にしなだれて来さうもない。

（前掲文344—5頁）

以上の引用からも明らかなように、俊子は、同性愛関係において、支配的な〈男〉のジェンダー・ロールを担うことを願っていた。そのため、同じく〈男〉のジェンダー・ロールを担おうとするらいてうは、俊子にとって、自分が優位に物事をはこぶことができない相手であるだけでなく、〈恋愛〉対象としてもなり得ない存在であった。らいてうの男性性を過剰なほど強調し、ときには批判的な眼で見ている俊子にとって、同性愛関係は、結局、異性愛関係の代替物にすぎない。男性／女性の役割を支配／被支配の関係として捉える異性愛の二分論は、俊子の同性愛関係のなかで、そのまま反復されている。最後、らいてうとのあいだには、とうとう何も起こらなかったことを残念に思っていた俊子は、「Nによく見るあのやぶられたる悲しみとでも云い度いやうなNの情緒をなつかしく」と、智恵子を思い出しながら帰路につく。俊子が、らいてうと別れ、急に思いだして懐かしく思えたのは、男性的ならいてうと相反する女性的な智恵子である。俊子の懐かしむ対象は、智恵子の女性性というより、智恵子との関係における自分の男役、あるいは主導権を握っている自分といった方が適切であろう。

5. 少年同性愛のパロディ——平塚らいてうと尾竹紅吉——

すでに検証したことからすれば、俊子とらいてうとの関係が未成立に終わったのは、一見、二人のジェンダー・ロールをめぐる葛藤が原因だと見られる。しかし、このような見方は、あくまでも俊子の立場からするものだと思われる。つまり、同性愛関係のなかで俊子は、かならず相手に〈女性役〉を強いる傾向にあったといえる。それに対して、らいてうにとって、異性愛関係の構図は、決して彼女の同性愛関係の唯一の型ではないと思える。彼女と尾竹紅吉との〈少年同性愛〉に擬似した同性愛関係は、それを裏付けている。二人の〈男色〉もどきの同性愛関係は、やはり二人の関係のなかで、らいてうと紅吉がそれぞれ担っていたジェンダーから検証しなければならない。ジュディス・バトラーは、かつて、ジェンダーを以下のように定義した。

ジェンダーがドラッグだとしたら、それが近付こうと試みる理想像を常に演出する模倣だとしたら、ジェンダーとは内面的な性、あるいは本質、あるいは心的ジェンダーの核という幻想を演出するパフォーマンスだということになる。ジェンダーは身振り、動作、歩き方など（ジェンダーの表象と解釈されている身体の演劇技法の配列）を通して、皮膚の表面に、深い内面性という幻想を演出する。²⁰⁾

ジェンダーを、男性が女性性を過剰に演じる異性装にたとえることによって、バトラーは、ジェンダーは本質的な存在というより、むしろ模倣を通じて行為遂行的に構築されるものだと述べている。つまり、本質的な性がまずあるのではなく、集合的に構築されたジェンダーの幻想があり、その幻想を模倣する形で現実のジェンダーが形成されるのである。

バトラーのこの論点は、まさに、平塚らいてうと尾竹紅吉のジェンダー・パフォーマンスにあてはまる。彼女たちのジェンダー・パフォーマンスは、〈模倣〉に基づいて築き上げられていたもので、現実の異性愛中心的なジェンダー・ロールをパロディ化して脱構築するような側面を持っている。らいてうと紅吉には、男装、そして、「良家子女」としてはふさわしくない喫煙、飲酒の習慣があった。紅吉は、かつて自分の男装ぶりについてこう語った——「僕がソフトをかぶってマントの襟をたて、紺足袋に男下駄をはいて煙草をふかしながら妹を連れて歩くとね、いろんなことを云って冷やかされるの、本当の男に見えるんでせうね」²¹⁾。

また、この紅吉が、らいてうにとって、いかなる存在であったかについては、らいてう自身の言及を通じて明らかになる——「私の少年よ。／らいてうの少年よ。私の為にあなたの身体の何処かに赤色を只一点つけることを忘れてはいけない」²²⁾。そのため、ふたりの同性愛関係は、〈男色〉そのものの模倣だと見られる。俊子がかつて、二人の関係を「逢つたあと」という題の詩のなかで、からかったことがある。

紅吉、
おまいのからだは大きいね。
R〔筆者注：らいてう〕と二人逢つたとき、
どつちがどつちを抱き締めるの。
Rがおまいを抱き締めるにすれば、
おまいのからだは、
あんまり、かさばり過ぎてゐる²³⁾。

この詩は、紅吉の身体の男性的な特徴だけでなく、二人の関係におけるらいてうのジェンダー・ロールをも暗示している。らいてうの能動的、また男性性のジェンダー・ロールが、紅吉との関係のなかでも一貫して変わらないと、俊子の眼には映っている。そのため、二人の同性愛関係は、〈レズビアン〉的なものというより、むしろ、〈男色〉に近いものとならざるをえない²⁴⁾。

「円窓より」は、らいてうと紅吉との交際関係の詳細が明記されている。これを見れば、二人の〈男色〉に擬似するホモセクシュアルな関係や、また、らいてう自身が、主動的なジェンダー・ロールを演じていたことが明らかになる。

①紅吉を自分の世界なるものにしようとした私の抱擁と接吻がいかに激しかったか、私は知らぬ。知らぬ。けれどあゝ、迄忽に紅吉の心のすべてが燃え上がらうとは、火にならうとは。
(「円窓より」『青鞥』第2巻第4号、83頁)

②夜、紅吉から来た手紙とハガキ総てを箱に入れ違へる。何と思つてか自分は知らない。

昨年十一月三十日〔筆者注：この時点は1912年5月〕を始めとして今日まで、手紙二九、ハガキ三八、あの忘れられない十三日の夜〔筆者注：二人で初めて過ごした夜〕、あの夜の後、始めてきた手紙と速達の朱印あるもの二つ三つを選んで再び読んだ。手紙を見詰めて座つたまま其夜はとうとう明けた。同性の恋といふやうなことを頻りに考へて見た。

（下線筆者。前掲文、89頁）

①の引用部分で、らいてうと紅吉とのあいだの能動・受動関係は、らいてうの行動からすでに明らかになっている。また、この能動・受動関係の構図は、〈男役／女役〉というあり方より、むしろ〈成年男子／少年〉の型に近いといえる。半年間、数多くの手紙を送り、らいてう一途に夢中になっていた紅吉の面貌は、②の引用部分から窺える。「らいてうの少年」と自認する紅吉と、それにたいして紅吉のことを「私の少年」と受け取るらいてう二人の「同性の恋」は、〈少年同性愛〉のようなものである。このように、この時代まで〈同性愛〉をただちに〈男色〉と同一視するそれまでの日本の神話は、二人の模倣行為を通じて揺さぶりをかけられたといえよう。

のちに、らいてうは、奥村博史と出会い、紅吉から離れていった。戸籍を入れないうまま、奥村と二人で共同生活に入り、二人の子供をもうけた。この出来事が一因となり、「青鞥」内部に分裂が起こり、最後には「青鞥社」が解散し、そのため雑誌『青鞥』が中断するに至った。湯浅芳子は、らいてうのこの決断について、自分の日記で彼女の行為を批判していた。

なぜ男なんかにつまずくのか。たとえ結婚という制度から外れたとしても、いつたん男と暮らし、その子を産んでしまつたら、生活そのものにも変わりはあるまい。女がまるごと手にできる自由、それは男と子供の他にあるはずだ²⁵⁾。

しかしながら、らいてうは、上記の引用文に現われている湯浅芳子の指摘どおり、家父長社会に妥協し、家制度に規定された〈女〉の役割を受け入れたのであろうか。彼女が奥村博史と共同生活に入る前、『青鞥』（第4巻第2号）に発表した両親宛の手紙「独立について両親へ」のなかには、二人の関係が、生物的レベルでの性差を逆転させたものであることをほのめかす部分がある。

御両親ももう御承知の昨年の初夏から始終私のところへ訪ねて参りました、そして私が若い燕だの、弟だのと呼んで居りましたH〔筆者注：奥村博史〕といふ妾より五つも年下のあの若い画をかく男とふたりで出来る丈自由なそして簡易な共同生活を始めやうとしてゐることなのでございます。（中略）私は五分の子供と三分の女と二分の男を有つてゐるHがだんだんたまらなく可愛いものになつて参りました。（110-1頁）

以上の引用から、らいてうの相手の奥村博史は、〈女性的〉な男であることがわかる。実際、奥村博史が〈女性的〉な男性であったという指摘は、「青鞥」同人とその周辺の人々の証言からも

知ることができる²⁶⁾。らいてうにとって、年下の奥村博史の〈男性的〉な部分は僅か十分の二である。〈男性的〉より、むしろ〈女性的〉に近い奥村博史のイメージは、らいてうの文脈からにじみ出ている。したがって、らいてうは、自分の性指向を同性愛から異性愛に変えても、当時、日本の家父長社会に規定されていた〈女〉のジェンダー・ロールを演じてはいなかったのである。

6. おわりに

「青鞥」同人の同性愛現象では、ヘテロセクシュアルとホモセクシュアルとのあいだの境界線が曖昧になっていることが、ひとつの特徴となっている。とくに、らいてうと俊子は、ヘテロセクシュアリティの領域だけでなく、ホモセクシュアリティの領域でも〈男性〉のジェンダー・ロールを演じようとしていた。そのため、彼女たちのジェンダー・パフォーマンスは、彼女たちのセクシュアリティを異性愛か同性愛かというような二項対立的図式ではとらえられないものにしてしまった。俊子とらいてうにとって、それぞれのセクシュアリティにおける〈男〉のジェンダー・ロールへのこだわりは、家父長制度によって規定される〈女〉の役割を拒否する姿勢であった。また、彼女たちの曖昧なセクシュアリティは、当時、日本社会における〈女性同性愛〉言説(=セクシュアリティ)に見られる偏見に対して挑戦しただけでなく、絶対的異性愛が推進する良妻賢母主義(=ジェンダー規範)を転覆するものでもあった。つまり、〈男〉のジェンダー・ロールを選択することは、身体的性、ジェンダー、そしてセクシュアリティとのあいだには連続性がなくてはならないとする〈強制的異性愛〉の構造を崩壊させる行為に等しかったのである。「青鞥」同人のレズビアニズムと女性解放を目指す運動との関係は、いかなるものであったのだろうか。アドリエヌ・リッチは、かつて、「レズビアン連続体」(lesbian continuum)について、以下のような定義を下した。

レズビアン連続体という用語には、女への自己同定の経験の大きなひろがり——一人一人の女の生活をつうじ、歴史全体をつらぬくひろがりをつくみこむ意味がこめてあって、たんに女性が他の女性との生殖器的性経験をもち、もしくは意識的にそういう欲望をいやくという事実だけをさしているのではない。それをひろげて、女同士の最も多くのかたちの一時的な強い結びつきを包みこんで、ゆたかな内面生活の共有、男の専制に対抗する絆、実践的で政治的な指示を与えあいを含めてみよう²⁷⁾。

リッチの「レズビアン連続体」の定義にしたがえば、「青鞥」は疑いもなく、「レズビアン連続体」を指向しようとした集団であった。もちろん、この「レズビアン連続体」の内部には、俊子とらいてうのように、両者の関係において、主導権、そしてジェンダー・ロールを奪い合い、「レズビアン関係」が崩壊してしまった例も見られる。だが、「フェミニズムとレズビアニズムは女を愛の対象とするかどうかという一点を除いて、自己解放を願う動機も目的も方法も歴史的に似かよっている」²⁸⁾ という大前提の下には、この日本における初めての女性解放運動組織は、疑いもなく「レズビアン連続体」の機能を十分に発揮していたとはいえないまでも、それを有してはいた。

彼女たちのジェンダー・パフォーマンスは、日本家父長社会を支える強制的異性愛のイデオロギー、つまり、良妻賢母主義の不安定さを暴露しただけでなく、既存の認識枠ではとらえきれないほど多様なセクシュアリティが、行為遂行的に創出することができることを見せてくれた。「青鞥」同人たちは、ジェンダー・パフォーマンスを介して、当時の家父長社会に対する新たな対抗勢力を形成するものであった。同時に、自分たちの身体的性、ジェンダー、そしてセクシュアリティの秩序を何者も規制することができないことを高らかに宣言したのである。

注

- 1) 令嬢たちは元、女学校同級生同士であった。心中の原因は、その中の一人が親から結婚をせまられていたためといわれる。心中した二人とも、上流階級出身なので、この事件について、当時のマス・メディア関係は盛んに報道した。また、同年の雑誌『婦女新聞』（1911年8月11日）をはじめ、『新公論』（1911年9月）、『新婦人』（1911年8月、聚精堂）などは「女性同性愛」問題を特集に組み、社会問題として注目を浴びた。
- 2) 古川誠「同性愛考」（『Imago』1995年10月）、207頁。
- 3) 同人たちの〈真正〉のセクシュアル・オリエンテーション／ジェンダー・アイデンティティを究明しようとすることは、真正／虚偽、本物／偽者を二項対立的にとらえる態度に通じるものである。本文ではむしろ、そのような二項対立的な思考方法そのものを脱構築するものとして、「青鞥」同人のジェンダー・アイデンティティやセクシュアリティのあり方を考察することをめざす。
- 4) 1911年9月刊の『新公論』が行った「性欲論」特集で、桑谷定逸の「戦慄す可き女性間の顛倒性慾」の一文は、1897年にロンドンで出版されたハヴロク・エリスの *Studies in the Psychology of Sex* Vol.1, “Sexual Inversion in Women” の内容と重なる部分が多い。桑谷はエリスのこの論文を抄訳した可能性が大きい。次は、桑谷の引用文と原文が重なる部分の一例である。
「女同志の情交は男同志の情交より多いことはあつても決して少ないことはない。吾々が比較的之を知らないのは、（一）一般男子がこの現象に付ては頗る無頓着で男性間の顛倒性慾ほど之を重く見ない。（二）女の同性性交は男の同性性交より看破に困難である。女同志の間柄は、男同志と違ひ普通の場合ですら非常に親密で馴、しいから、女同志の間の異常な情熱を見ても、吾々男子は左程之を怪まない」（36頁）。
“Notwithstanding the severity with which homosexuality in women has been visited in a few cases, for the most part men seem to have been indifferent towards it; when it has been made a crime or a cause for divorce in men, it has usually been considered as no offence to at all in women. Another reason is that it is less easy to detect in women; we are accustomed to a much greater familiarity and intimacy between women than between men, and we are less apt to suspect the existence of any abnormal passion.”
（“Sexual Inversion in Women,” *Studies in the Psychology of Sex* Vol.1, p.79）
- 5) 桑谷定逸「戦慄す可き女性間の顛倒性慾」（『新公論』1911年9月）。
- 6) 同前、42頁。
- 7) 古川誠の「同性愛考」（『Imago』1995年10月）を参照。
- 8) 内田魯庵「性欲研究の必要を論ず」（『新公論』1911年9月）、3-4頁。
- 9) 「同性の愛」（『婦女新聞』1911年8月11日）。
- 10) 「同性の恋と其实例」（『婦女新聞』1911年8月11日）。
- 11) 青鞥」同人に好意を寄せている紅吉の叔父、尾竹竹坡は、かつて「女の問題を研究するための雑誌なら、暗闇で働かなければならぬ女の実態を知っておく必要がある」と、紅吉たちにアドバイスしたため、紅吉とらいてうらは、吉原を「社会見学」という目的で訪ねた。

- 12) 奥村博史を指す。らいてうは、大正元年の夏に軽い肺結核をわずらっていた紅吉の療養先・茅ヶ崎に出かけて、初めて彼に出会った。のちに、らいてうは、入籍せず奥村博史と共同生活に入った。平塚らいてう『原始、太陽は女性であった 上』（大月書店、1973年）を参照。
- 13) 禅僧・中原秀岳を指す。中原は、らいてうが参禅していた浅草の海禅寺の住職代理である。のちにらいてうは、中原和尚と「接吻事件」を起こし、和尚に求婚を迫られた。平塚らいてう『原始、太陽は女性であった 上』（大月書店、1973年）を参照。
- 14) 「一年間」『青鞥』（第3巻第2号1913年2月）。
- 15) 今東光の『東蘭帖』のなかでは、俊子が幸田露伴の門下で修業していたときに、兄弟子の田村松魚に強姦されたと指摘している。それに対して、長江曜子の「田村俊子の『悪寒』について——その恐怖の本質——」（『文学研究』1990年1月）のなかでは、今東光の指摘はまだ論議する余地があると示している。だが、「処女喪失」というテーマが、俊子の作品の中で繰り返し登場していることから見れば、俊子には「処女性」への執着がその作品に端的に現れているといえよう。
- 16) この引用に表れているジェンダーと色との関係については、女性性が〈丹色〉によって表象されることに対して、男性性が〈水色〉によって表象されている。
- 17) 「悪寒」『田村俊子作品集 第1巻』（オリジン出版センター、1988年）、270-1頁。
- 18) 「日記」『田村俊子作品集 第3巻』（オリジン出版センター、1988年）、341頁。
- 19) この時期、らいてうのもとを離れていた奥村博史が、らいてうとの交遊をふたたび始めた。らいてうと奥村とのつきあいは、紅吉が嫉妬して、奥村に絶交状や脅迫状を送ったりしたため一時期中断した。ここでの「燕」は、奥村のことを指す。
- 20) ジュディス・バトラー「模倣とジェンダーへの抵抗」杉浦悦子訳、『Imago』第7巻第6号1996年5月）、131頁。
- 21) 「雑音——『青鞥』の周囲の人々『新しい女』の内部生活」『定本 伊藤野枝全集第1巻』（学芸書林、2000年3月）、140頁。
- 22) 平塚らいてう「円窓より」（『青鞥』第2巻第4号）、89頁。
- 23) 「編集室より」（『青鞥』第2巻第10号）、135頁。
- 24) この時点における女性同性愛関係についての描写は、〈男色〉を意識したものはいくつか見られる。らいてうは、自分と紅吉との同性愛関係を〈少年愛〉として描いていた。また、田村俊子のデビュー作『あきらめ』のなかで、ヒロイン・富枝は下級生・染子と床をともに一夜を過ごしたのち、上田秋成の物語の一節、「可愛がり切つてゐた美しい小性が死んでから、その坊さんは狂乱になつて小性の死骸が腐るまでも、骨を甜めたり肉を食べたりして執着してゐた凄い話」を想起した事もその例である。
- 25) 沢部仁美『百合子、ダスヴィダーニャ——湯浅芳子の青春』（文芸春秋、1990年2月）、132頁。
- 26) 青鞥の同人、伊藤野枝は、奥村に対する紅吉の嫉妬ぶりについて、こう述べている。「平塚さんを忘れることが出来ないと同時に、奥村さんを許すまじき憤怒の目を見た。物優しい、奥村さんの素直な、何処か女性的な態度が——彼女の疝に障った」（『雑音——『青鞥』の周囲の人々『新しい女』の内部生活』『定本 伊藤野枝全集 第1巻』（学芸書林、2000年3月）、156頁。
- 27) アドリエンヌ・リッチ「強制的異性愛とレズビアン存在」大島かおり訳、『血、パン、詩』（晶文社、1989年）、87頁。
- 28) 竹村和子「資本主義社会とセクシュアリティー〔ヘテロ〕セクシズムの解体へ向けて—」（『思想』岩波書店1997年）、89頁。